

## 研究発表



## 「まぼろしの覚鯨城」

発表者 川崎町 葛西 信一

ご紹介いただきました川崎町の葛西でございます。ただいまから「まぼろしの覚鯨城」と題しまして、3年間の学習をここで発表させていただきます。

平成18年9月に本会、この「みちのく中央総合博物館市民会議」の方から、河崎柵と黄海の戦いについて、高橋先生のご講演があるという案内を頂戴しまして、その講演会に参加させていただきました。そこで高橋先生の講演をお聴きし、その素晴らしい内容に感銘を覚えたわけでございます。そしてまた、この市民会議の取り組みに対しても素晴らしい取り組みであると、そのように感じまして仲間に入れていただき、会員に加えさせていただいたわけでございます。私は主に「河崎柵」に取り組んでまいりましたが、高橋先生より「河崎柵」はここ以外にはないのだと、「河崎柵」の「擬定地」ではなく「確定地」とはっきり断定できるとお聞きできて、非常に嬉しく思っておったわけでございます。

ところが最近になって、高橋先生は「河崎柵」だけでは半分だよと、後の半分は「覚鯨城」であると、そのようなお話を頂戴したわけでございます。このことについては、はじめてのお話なのでびっくりしたわけでございます。それ以来この市民会議の学習会には欠かさず出席させていただいて勉強をしてまいりました。私はビデオにおさめたり、事務局が録音して、それを起こして活字にしてくださる伊藤さん夫妻にはほんとうにご苦労を

かけたんですが、その活字になったものを何度も読んで理解をしたわけでございます。さらに私は図書館に行きまして、多賀城とか桃生城、伊治城、胆沢城、こういう本なり、発掘調査の資料なりを借りたわけですが、「胆沢城」の本については高橋先生が書かれたものでございました。昭和46年に発刊されたその本に「まぼろしの城 覚鯨城」という見出しがありまして、これを読んだんですが、その見出しのとおり、本日の題を「まぼろしの城 覚鯨城」ということで発表させていただくわけでございます。よろしく願いたします。

資料の三段目にあらわしたのは、高橋先生から直筆で頂いたもので、ほんとうは25項ほどあるんですが、そこに四つほど都合であげておりますし、次のページには活字に起こした「遠山村覚鯨城」、特に「覚鯨城」に関係あるところを、四つほど選んでのせてあります。その部分について簡単に説明をしたいと思います。

先ず「宝亀三年九月二十九日紀」とありますけれども西暦777年、大伴宿弥駿河麻呂が陸奥按察使の職に任命されたとあります。「按察使」というのは、国司の上の役職のことですね。陸奥の、岩手県の県知事のもっと上だと、そのように理解しているわけですが、そういう職に大伴駿河麻呂が任命されたということになります。

それから次の「八」ですが、宝亀5年10月には歴代の諸将、歴代のどんな將軍も討ち果たすこと

のできなかった「遠山村」を平定したと、そのように書かれているのでございます。

「遠山村」とは、後から千葉先生が詳しく述べられるので、簡単に触れておきます。遠山村とは東海道と東山道がドッキングしたところであると、東海道は多賀城から北上川河口をさかのぼって桃生城を、そこから海岸沿いをさらに北上していくのですが、東山道は今の国道四号線沿いに栗駒町に「伊治城」を造って、そこから更に北上して行って合体したところが「遠山村」であると、そのように理解したわけでございます。

それから「十六」番にとんでいきますけれども、宝亀七年には船五十隻を陸奥の国に配備したとなっております。そして「二十五」に行きます。宝亀11年ですが、これ全く簡単にお話したいと思いますが、「船路を取りて、遺賊を伐ち撥わん」と載っておりますが、「川が凍って動きが取れない」ようでございます。しかし賊の方は寒さに慣れておるといことで北上川の凍った上を、そういう船の通れないところでも南下して攻めて来ると。それで南下する賊を防ぐことと、また3、4月暖かくなって水が溶けてきたら一挙に胆沢の賊を討つ、その根拠地になる「覚鯨城」を造りたいと、そういうことを申し上げたら、天皇の方でも同意されたという内容のようでございます。

以上の内容から胆沢の賊を討つルートと手段は水上交通にあったということが分かるわけでございます。東海道、東山道をドッキングさせて力を結集して胆沢の賊を討つということです。しかし伊治城の城主の伊治公<sup>いじの きみあざまろ</sup>麻呂という人の反乱で混乱が起これ、これが完成されたかどうかまでは分からないとでございます。

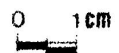
これから映像によりまして、ここに「覚鯨城」が置かれようとした証拠として、ここで出土した「和同開珎」を、高橋先生があげておられますので、その和同開珎のことと、それから水上交通と、この二点を映像によって説明を致したいと思いま

す。映像の方、お願いいたします。

これは「胆沢城」。高橋先生の著書でございます。昭和56年11月発行の本ですが、この95ページに「まぼろしの城 覚鯨城」というのが載っております。これが国土交通省にも、その「和同開珎」が現れた発掘調査資料としてあげられています。13の住居跡が出ております。それから「蕨手刀」。これが「和同開珎」でございますね。それから当時の拠点だった多賀城、その以北に桃生城と伊治城が築かれ、国家の拠点がどんどん北上していきます。これらの城があったことなどから、当時は大きく二つのルートがあったようでございます。一つは現在の国道四号線、東山道ですね。もう一つはあまり注意が払われておりませんが、北上川の東を北上した路線として東海道があったと、そのように書かれて居ります。

それから「和同開珎」は、通常の通貨としてではなく、その貴重さから象徴的なメダルのような感覚で用いられていた可能性があるとのこと。この「和同開珎」の本は、銚子の鈴木明先生に拝聴しましたら、「やあ和同開珎ということ、すばらしいことだよ。俺、本があるから」と見せていただいたものでございます。表紙に載っているオタカラの「和同開珎」でございます。

それから初めて貨幣を造った銅が産出された埼玉県の秩父でも「和同開珎」の出土、これも和同開珎が発掘された場所でございます。赤く色づけした13箇所が「堅穴住居跡」で、「和同開珎」は、この2箇所から出ております。それから「蕨手刀」は、いちばん上の方から出ております。そういう



和同開珎

発掘結果でございます。これはその竪穴住居跡の現地説明会の様子です。音を出していただけますか。(現地調査の映像公開、現地の説明が入る)

次に、水上交通についての説明を申し上げます。大きい黒い線が北上川、細いのは砂鉄川でございます。ここが「一杵」、そしてちょっと上の方に、この辺に亀の子状態に石が張り詰めてありました。高橋先生は対岸の弥栄の方にも何かあったのではないかとおっしゃられましたので、このあいだ「弥栄」の古い地図を見せていただきましたら、古い館址が弥栄にあったようです。

この画面は国土交通省に報告した画面でございます。「框」の出現を三人の方々に確認したということで、こういう図面を国土交通省に報告したわけでございます。「框」はここに現れております。これは22年に現れた框の姿で10メートル、それからここは3メートルぐらい現れたと、そして石はこのように張りつめてあったのかなと、そのように報告しました。すぐ近くの北上川で見つけた框(かまち)とか水車が、この辺にございます。

それからこれは平面図でございますが、北上川はここで、この「框」がこう出っ張っておりますので、この高さが4メートル50ぐらい、平水より

4メートル50、そして傾斜して川にこういくんです。そうすると4メートル50の増水までは、常に船が着きやすいということになるわけです。このように出っ張ったところで水が逆流のかたちでよどむようにすると、船がここのところに停めやすい。すると4メートル50ぐらいの増水でも船はいつでも楽に着けやすいと、こういうことになります。

この画面は銚子の「権現様」でございます。750年、60年。その時代に、蝦夷平定と北上川航行安全のために勧請したと、そのように本に書かれてございます。胆沢の賊の平定には、北上川のここが、ほんとに重要な役を果たしたわけでございます。その上に、こういう「覚鑿城」があらわれたとなれば、この場所がどんなに重要な場所だったかということが、もっともっと上乘せさせられてきていると感じています。

最後になりましたが、この場所から和同開珎とか蕨手刀とか多くの遺物、宝が出てきたのですが、これらの宝をこの地に戻してもらいまして、この地方の活性化を図れるならば幸いだと、そのように祈念いたしまして、私の発表を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

